島嶼学概論Ⅱ　中之島講義

農学研究科　生物生産学専攻　修士１年
学籍番号　3412810073　島田温史

・中之島実習を通して

島嶼学概論Ⅰでは、三島村の硫黄島を訪れジャンベや島での祭りを体験し貴重な経験ができました。今回の島嶼学概論Ⅱでは、十島村の中之島という硫黄島よりもさらに南にある島を訪れました。中之島は十島村の中で最も大きく人口の多い島で、鹿児島県天然記念物であるトカラウマや「トカラ富士」と呼ばれている御岳など自然に溢れた島です。また、硫黄泉の温泉があり少し硫黄の香りが強かったけれども体の芯から温まり気持ちの良い温泉でした。中之島では農作物も栽培されておりサトイモの仲間であるタイモや島バナナ、カンキツ類であるタンカンなどがありました。島バナナは島の至る所で見られました。

今回の中之島実習では地元の畜産農家の平泉さん、Ｉターンで島に生活している古橋さん、島に唯一ある診療所の看護師の手塚さんからお話を聞くことができました。まず、畜産農家である平泉さんからは畜産の現状や問題点を聞きました。今年の初競りで十島村の牛が最高値になり 1 頭当たりの単価も高くなっていると聞いたときは島でも本土と遜色のない牛を生産できることに驚きました。しかし、本土へ売りに行くため船の運賃が高いことや獣医がいないこと、ふん尿の処理などさまざまな問題があることが現状ということでした。

漁師の古橋さんは千葉県からのＩターンした方でした。夏場は旗流し漁によるキハダマグロ漁、冬場は素潜りによるイセエビ漁で生計を立て、マグロは鹿児島漁連に、イセエビは個人のお客様に売っているということでした。キハダマグロ漁は 15 時間漁をするため時期の睡眠時間は 1 日 3 時間程度と非常に少なく私では耐えられないと思いました。漁師を始めた当初は中々生計が立たず苦労したが、勉強に勉強を重ね今では市場でも高い評価を得られるまでになったと聞き、今でも常に勉強をし続ける姿勢にはとても尊敬でき私も見習わないといけないなと感じました。

看護師の手塚さんは東京からのＩターンの方でした。島の医療の実態を聞き、本土とはかなりの格差があることがわかりました。中之島には医師がいなく日本赤十字病院から 3 ヶ月交代で月 2 回診療に来るだけということでした。看護師の方は縫合や医療行為が禁止されていていざという時に処置ができず困るといったことが起こっており、医療態勢が不十分だと感じました。また診療の他にも緊急時のドクターヘリへの対処や高齢者への体操教室など看護師１人への負担が非常に大きく労働面から見てもかなり厳しい状況であると思いました。

3 人それぞれの話を聞いて島で生活していくことの大変さがより

わかりました。しかし、3 人とも明るく気さくな方々でそれぞれの仕事に対して信念を持っていることも同時に感じることができました。私も信念を持って物事に取り組んでいきたいと思いました。今回お話ししていただいた平泉さん、古橋さん、手塚さん本当にありがとうございました。また機会があればお話しを聞きに中之島に訪れたいと思います。貴重な体験ありがとうございました。

・島の発展のために必要なこと

島は周りが海に囲まれているため本土や他の島との行き来が困難です。そのため医療や産業が発達しません。また十島村での高齢化率は 34%と国の高齢化率の約 1.5 倍と大変高齢化が進んでいます。どうすれば島が発展していくかと考えた時いくつかのことが考えられました。

まず、島では働く場所が少ないのでまず働く場所を増やすことが必要になります。中之島では広い空き地が数多く見られたことから空き地を利用しての畜産や農業をするのが良いと感じました。畜産に関しては高い評価を得ているのでふん尿処理などの諸問題を解決しながら放牧地を広げていくことで高い収入が得られると思われます。ふん尿の処理としては堆肥を作り農業に肥料として利用してもらうことで少し解決されると考えられます。農業では、カンキツ類やタイモ、島バナナ、ビワなど島特産の作物を栽培面積の増加により産業として成り立つようにしていくことが重要になります。空き地を開拓し農地にすることで栽培できる場所を確保し、I ターンの人に農地を提供することで人口も増えていくと考えられます。

次に医療では看護師の他に助産師を十島村のどこかに常駐させることです。若い人がもし子供を産むとき助産師がいることにより本土に行かなくても良くなるため、若い人の島への移住がしやすくなると考えました。若い人が移住してくれれば高齢化率も減少していくと考えられます。

さまざまなことが考えられましたが現実問題として中々実現させるのは難しいと思います。そのため今後は島の発展のためにも島の人たちが島の現状をネットなど利用し島外の人へのアピールをより一層していくとこが大切になると思います。